【論　文　提　出　者】　社会文化科学教育部　教授システム学専攻
氏名　石田　百合子
【論　　文　　題　　目】　国立高等専門学校機構におけるアクティブ・ラーニングの組織的取組みに関する研究

【授与する学位の種類】　博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

石田百合子氏が提出した博士論文「国立高等専門学校機構におけるアクティブ・ラーニングの組織的取組みに関する研究」は、独創性・有用性ともにすぐれた研究業績であり、以下の経緯で審査委員会は本教育部に提出する学位論文として博士号にふさわしいとの判断に至ったことをここに報告します。

①　　論文の位置づけと審査経緯
本論文は、高等専門学校におけるアクティブ・ラーニング（AL）をその推進過程に着目してまとめたもので、他に類を見ない独創的な研究である。石田氏が提出した博士論文に対して、審査委員会は令和元年 11 月 15 日付で修正要求を通知した。それを受けて、修正論文が令和元年 12 月 15 日付で提出された。それを受けて令和２年 1 月 16 日、審査委員全員出席のもと審査委員会を開催し、修正論文に基づく口頭発表及び試問を行った。

②　　本論文の示す新知見と独創性
本論文は、第１章で研究背景と研究目的を述べたのち、第２章では、高等教育における AL 推進上の課題、第３章では課題解決のための教育理論および研究方法について検討した。第４章では、高専機構が全国の高専の AL 推進責任者を対象に実施した研修を設計・実施・改善し、その経験をもとに AL 推進研修についてのデザイン原則を提案した。第５章では、勤務校の高等専門学校において全教員で担当するプロジェクト型科目の授業設計･運営準備ツールとしてハンドブックとワークシートを開発し、新しい授業形式の組織的導入支援についての効果を評価した。第 6 章では、AL 推進役を担っていた自身の活動について、自己エスノグラフィー手法を応用して回顧的にふり返り、「支援者」という様相とその役割の変遷を記述的に分析した。第 7 章では、以上の成果を AL 組織的推進という観点から考察し、第 8 章では、論文を総括して結論を述べた。

③　　本論文の評価
本論文の成果は、これまでに６回の国内学会の全国大会や研究会で口頭発表により報告し、高い関心を得てきた。また、第４章及び５章で示した研究成果については、以下の査読付学会誌に採録されており、独創性が認められている。

石田百合子，根本淳子，松葉龍一，平岡斉士，鈴木克明（2019）同僚モデルを適用したアクティブ・ラーニング推進責任者研修の開発とデザイン原則の提案－国立高等専門学校機構での事例から－，教育システム情報学会論文誌 36(4)：243-256
石田百合子，石田祐，梶村好宏，松葉龍一，根本淳子，鈴木克明（2017）サービスラーニングの原則・基準を活用した PBL 科目の授業設計・運営準備ガイドおよびワークシートの開発，教育システム情報学会論文誌 34(2)：196-201

【最終試験の結果の要旨】

石田百合子氏が提出した論文「国立高等専門学校機構におけるアクティブ・ラーニングの組織的取組みに関する研究」をもとに、令和２年１月 16 日 13:30 より、審査委員全員出席のもと審査委員会を開催し、修正論文に基づく最終試験を行った。

その結果、学位論文の記述内容に関する質疑に的確に答えており、当該論文の先行研究や関連概念・理論についての背景的な知識も豊富で、論考の過程も明確に整理されていることが分かった。また、研究の背景や教育工学的意義ならびに当該研究の限界や今後の発展の方向性に関する質問についても、研究の成果および本人のこれまでの学術活動によって得た見識に基づいた学識が披露された。

また、令和２年１月 31 日 16：30 より行われた公聴会では、複数の他大学からの参加者の質問にも的確に応答できており、全国の高専の推進担当者を集めて行った研修設計から得られた知見をデザイン原則(案)として提案したことや、A 高専での組織的取り組みを自己エスノグラフィーを介してまとめたことに関心が集まった。また、研究成果を複数の学術論文(査読付き)として公表していることも高く評価され、今後の研究発展の方向性が示唆された。

よって、石田百合子氏は、博士の学位を授与されるにふさわしい学識と研究遂行能力を有するので、最終試験を合格と判定した。

【審査委員会】

主査　鈴木　克明
委員　松葉　龍一
委員　平岡　斉士
委員　戸田　真志